

高次脳機能障がい “ シナプス ” ニュースレター

第16号 (平成27年9月1日)

★高次脳機能障がいコーディネーター日より

『高次脳機能障害ファシリテーター養成講座(実践編)』 を開催しました。

平成27年7月、宮崎県身体障害者相談センター主催で高次脳機能障害ファシリテーター養成講座(実践編)の研修会を開催しました。

講師は複数人の専門職で構成されるNPO法人高次脳機能障害支援ネットの先生方です。

一連の講義の中で橋本圭司先生のお話にあった、近年の医療制度の枠の中で維持することが難しくなっている「こころの支援」のお話の部分をまとめさせていただきました。

【高次脳機能障害ファシリテーター養成講座の目指すもの】

講師：NPO 法人高次脳機能障害支援ネット
理事長 橋本圭司先生

◎高次脳機能障がいとは

脳卒中(脳血管障害とも呼ばれ、脳梗塞、脳出血、くも膜下出血がこれに含まれます。)や脳外傷、脳炎、低酸素脳症などの脳損傷が原因で、運動や感覚以外の脳の高いレベルでの機能、つまり、言語や記憶、注意、感情のコントロールなどの知的機能が壊れた状態を高次脳機能障がいと言います。例えば、さっき言ったことを全然覚えていない(記憶障害)、些細なことにすぐ腹を立てて常にイライラ

している(脱抑制)、何をやってもうまくいかず、すぐパニックになってしまう(遂行機能障害)、などがそれです。

しかしながら、世の中には、やる気がない人や物覚えが悪い人などたくさんいます。この障がいのやっかいなところは、厳密には正常値が存在しないことです。外見からは、どこまでが元々のキャラクターで、どこからが障がいによるものなのかの判断が難しいのが、この障がいの特徴なのです。

◎支援者自身が変わろうとする勇氣

この世の中は「障がい者を治そう。」としますが、「適応していければ良い。」はずです。

障がいがある人も、同じ障がいに苦しんでいる人を助けることが出来ます。むしろ、同じ障がいだからこそ、助けることが出来るのです。患者や周囲の人々は、障がいがあることを嘆き苦しむあまり、何とか、もと通りに戻ることばかりにこだわってしまいがちになります。しかし、リハビリテーションの本当の意味は、もと通りに戻ることではなく、そのような苦難に出会った時に、いかにそれと向き合い、自分自身が、今日、明日から何ができるかを問いかけることではないかと思います。病気や障がいに遭遇したこと

を、いつの日かプラスに考え、そのような経験をした自分にしか出来ない「何か」を見つける過程こそが、真のリハビリテーションと言えるのではないのでしょうか。

当事者の方の障がいや問題点を見つけ、それを無くそう、補おうと当事者のお尻ばかりをたたき支援はもうやめにしようではありませんか。高次脳機能障がいと向き合うリハビリテーション、その本当の対象は、それを取り巻く我々自身の心の中にあります。

◎マイナスをプラスに変える

長年、高次脳機能障がい者の支援に携わっていると、よくなる当事者には、いくつかの共通点があることに気づきました。

1つは「とてもよく笑う」。

笑うと心が晴れやかになり、周囲にも良い影響を与えるようです。当事者の笑顔は、多くの場面で家族も含む支援者を幸せにしてくれます。

そして明日への生きる活力を与えてくれます。

2つめは「感動」。

全国で様々な当事者や家族の体験談を拝聴していると、人や物への感動、つまりはどれだけ「ワクワク・ドキドキ」を経験できたかが、その後の回復の有無と大きく関係していることに気づかされます。出会いに感動する。スポーツに感動する。芸術や遊び、音楽に感動する。

病院でのリハビリテーションも、決められたプログラムを淡々とこなすのではなく、その日その日のワクワク・ドキドキをいかに共有できるかをずっと考えてみていただきたいものです。

最後に「感謝」。

大変良い人生を歩んでいる当事者と家族が共通して口にする言葉があります。

それは、家族や友人などこれまで支えてくれた人への感謝の言葉です

「生んでくれてありがとう。」「これまで支えてくれてありがとう。」「事故や病気にあったからこそ分かることがある。」

「障がいを負ったからこそ、新しい出会いを得ることが出来た。」

普通に何不自由なく生活していると、我々は「笑い」「感動」「感謝」、この3つを生活において実感する機会が非常に少ないように思います。

高次脳機能障がいの当事者と家族は、その大切なことを、私たちに気づかせてくれます。

高次脳機能障がいによって当事者と家族が感じる負担感は、我々専門家がいくら時間をかけて勉強したところで、どうも理解できることではありません。学校で学んできた医学の専門知識は一度頭の中から追い出す勇氣が必要です。

知識を得るための「知識＝机上での勉強」ではなく、当事者と家族が命がけて経験してきた「からだの記憶」を手がかりに、「知恵＝生きるために本当に必要な知恵」を、是非とも学ばせていただこうではありませんか。

そして、橋本先生は最後に「何よりもまず、私自身が『前向きな良い言葉を語りかける。』『ふと立ち止まり、自然体をこころがける。』、そして『今ある自分に素直に感謝する。』ことを実践したいと思います。」と結んでおられました。

以上、橋本先生のお話と資料からまとめさせていただきました。

当日の研修に都合で参加できなかった方もたくさんおられます。先生のお話をあまり要約しすぎると分かりにくくなって、かえって解釈に誤解を招くといけな
いと考え、少々長いニュースレターになりましたことをお許し下さい。



問合せ先

高次脳機能障がい総合相談・支援拠点機関：宮崎県身体障害者相談センター
担当 有木 平田

住所 宮崎市霧島1丁目1番地2

電話 0985-29-2556 F A X 0985-31-3553

E-m a i l shintaishogaisha-sodan-c@pref.miyazaki.lg.jp